

「西安交通大学サマースクール参加報告書」

京都大学法学部 4 回生 福山功太

1972 年は日中国交正常化の年ですが、それから 40 年余り経った今、留学やビジネスなど、民間交流が盛んになっています。しかしながら 2010 年の尖閣諸島付近での漁船衝突事件以来、日中関係は必ずしも良い状態であるとは言えません。さらに日本国内あるいはアジア地域では盛んに「中国脅威論」などが唱えられ、事ある毎に感情的な論調になっている状況です。たとえば、新聞各社の世論調査において、7 割近くもの日本人が「中国を信頼できない、イメージが悪い、脅威である」などと回答している有様です。これはあまりにも安直な感情論です。何とも皮肉で、残念でなりません

私自身はかつて中国を訪れたことがあり、かねてから中国の国内政治や外交などを含めて強く関心があります。そういった中で今回は、中国語の語学力向上と中国の文化を学ぶ事を目的として西安を訪れたのですが、「文化」に着目したのは少し理由があります。昨今の日本において、日中関係を論じる際に必ずと言っていいほど「経済関係」が言及されます。「経済関係が重要」だから日中関係を大事にしようという主旨の論調が多いのです。つまり見方を変えると日中関係は、所詮は打算的なものでしかない訳です。私はこれには一種の違和感を覚えています。もちろん日中の経済交流は大事で、「戦略的互惠関係」なるものは重要です。しかしそういった表面的な関係ではなくて、もっと深い関係があるはずだと思っているのです。日本の文化の根源には中国の文化があります。それが源流になって今の日本があるはずで、それにもかかわらず、多くの日本人は、中国に対する敬いや親しみの心というものを忘れていく気がするのです。そういった意味で、文化的な面で中国と交流することは大事ですし、彼らの文化や感覚、考え方といったものにも直に触れて、私自身もさらに中国への理解を深めたいと考えたのです。

かつて中国を訪れたことがあったので、中国や中国人に対しての不安や心配はほとんどありませんでした。ただし、「事件」が起きると両国人ともに感情的になり、マスメディアはその感情を煽るので、その点は密かに心配していましたが、幸いにも今回の滞在中は両国間で「事件」はありませんでした。滞在中には、大学やホテル、スーパーマーケットなどで親切な中国人に数多く接しました。どこの国でも言えるはずですが、親切な人も傲慢な人もいて、色々な人がいるのが当然です。勝手にイメージを持つのはやはり残念なことです。

西安では兵马俑や大雁塔、興慶公園など数多くの名所を案内していただきましたし、長恨歌などの素晴らしい舞台を鑑賞する機会も与えていただき、非常に感銘を受けました。また、いずれの文化についても中国の人たちは強い誇りを持っている印象も受けました。現地の文化を肌で感じていると、本当に日本の文化は中国の文化に端を発しているものが多いと強く実感します。興慶公園には阿倍仲麻呂の記念碑が建てられていましたが、およそ 1400 年前から日本と中国は交流があったのです。

昨今では表面的な経済関係ばかりが言及されますが、J-POP、Japanimation、J-Fashion などの現代の日本文化は確実に中国にも伝わっています。「ワンピース」、「浜崎あゆみ」、「AKB48」、「かわいい」など、中国の若者はこういった日本文化を非常によく知っているのです。我々日本人はこういったことも再認識して、日中関係を大きな視点で見つめ直す必要があると私は思っています。